

批判的実在論に基づいた2つの研究デザインによる トライアングュレーションの試み —インテンシヴおよびエクステンシヴ概念の再検討を通じて—

野村 優ⁱ

近年、社会科学において質的アプローチと量的アプローチを併用する「混合研究法」についての議論が盛んに行われている。とくに、具体的な研究事例を取り上げ、その類型を論じることは盛んに行われている。しかしながら、そもそも、どのように複数の研究法を組み合わせるべきなのかという問題や、複数のデータや調査者、理論、技法を使うことにより信頼性が高まるという範囲を超えて、より詳細に複数の研究法を組み合わせる意義を取り上げた研究は少ない。そこで、本論が試みるのは、批判的実在論に依拠して、「存在論的深さ」を念頭に複数の研究法の組み合わせることの意義を、理論研究によって明かにすることである。ただし、その際には、質的アプローチと量的アプローチという区分を出発点としつつも、それだけでは取まらないインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区分へと、枠組みを刷新して再検討する必要がある。そして、再検討の結果としてみてきたのは、それぞれの研究法が対応することのできる問いの存在論的位置に基づいた、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの「トライアングュレーション」であった。

キーワード：科学方法論、混合研究法、トライアングュレーション、科学哲学、科学的実在論、批判的実在論、存在論的深さ

1. 質的アプローチと量的アプローチの「混合」という問題について

社会科学における研究方法を、質的アプローチと量的アプローチの二つに区分することは、今更とりたてて確認する必要がないほど広く行われている。さらに、近年では教育学や社会学をはじめとした分野において、そうした区分に基づいて質的アプローチと量的アプローチを併用する「混合研究法」¹⁾ (MMR: Mixed Methods Research) の実践が著し

い進展をみせている (Tashakkori & Teddlie 2010, 中村 2013)。また、このときの「混合研究法」の定義は、「単一の研究あるいは一連の調査プロジェクトの中で、調査者が質・量両方のアプローチ・方法を用いて、データを収集分析し、知見を統合し、推論を導き出していく研究」²⁾ (Journal of Mixed Methods Research, 2016) と示されている。しかしながら、Johnsonら (2007) や川口 (2011) も指摘するように、理論的な観点においては、質的アプローチと量的アプローチを組み合わせるといった漠然としたイメージを超えて、より詳しくは何をもって混合研究法と呼ぶかについての決定的な見解がない状況にある。

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

そもそも、社会科学において、いくつかの研究法を組み合わせる試みは、Cambell & Fiske (1959) による「多元的操作主義」(multiple operationalism) の提唱をきっかけとして活発に行われるようになった。ただし、Cambell & Fiske が想定していたのは、ある1つの調査対象の持つ複数の特性に注目したうえで、それぞれを個別に扱う量的方法を組み合わせることによって研究の妥当性を高めることであった。つづいて、Denzin (1970) が、質的アプローチと量的アプローチの組み合わせを含む「トライアングレーション」(triangulation) という概念を打ち出した。より詳しくは、データや研究者、理論、技法という研究についての4つの大きな要素それぞれにおけるトライアングレーションを区別した上で、さらに細かな類型を提出していた。Denzin の類型にしたがうと、質的アプローチと量的アプローチの組み合わせは、「技法におけるトライアングレーション」というタイプのなかの、さらに「技法間トライアングレーション」に位置づけられていた。さらに、Tashakkori & Teddlie (1998) が、それを引き継ぐかたちで、とくに質的アプローチと量的アプローチの組み合わせに焦点を絞った「混合研究法」を追求した。くわえて、2003年に Tashakkori & Teddlie が、この研究法についてのハンドブックを出版したことや、2005年に Creswell や Tashakkori, Clark らが Journal of Mixed Methods Research という学術専門誌の刊行を準備した³⁾ ことをきっかけとして、質的アプローチと量的アプローチを併用す

る、混合研究法を利用した研究実践が大きな広がりをもせることとなった⁴⁾⁵⁾。

しかしながら、こうした由来をもつ混合研究法を追求する難点は、質的アプローチと量的アプローチの双方が、それぞれに異なる哲学的背景に支えられていること (Crotty 1998, Creswell 2007) に求められる。そもそも、質的アプローチと量的アプローチは、調査によって得ることの出来るデータの種類やデータの収集方法、分析方法といった手法のレベルだけではなく、それらを導き出すための方法論や理論的視点、認識論といった、より基礎的なレベルから異なっている。そのために、それらの本質的に異なる哲学的背景を組み合わせることには困難があるとされる (桜井 2003, 樋口 2011)。このことについては論者によって整理の仕方や注目点にいくつかの違いが見られるのではあるが、混合研究法を論じるときによく参照される Crotty (1988) に従って、それぞれのアプローチの事例における「四つの要素」を確認しておくこととなる。

こうした図式に従った整理は、いくつかの重要な示唆を与えてくれる。まずは、縦軸に沿って、それぞれの「認識論」「理論的視点」「方法論」「手法」という、ある研究実践におけるそれぞれの「要素」のあいだのつながりを確認することができる。さらに、横軸に沿って並べられた要素の関係性に注目すると、それぞれの事例によって示されるように、それぞれの「要素」のなかに様々なバリエーションがあることも確認できる。そして、こうした整理を受けるか

表1 研究プロセスに含まれる四つの要素

	質的アプローチの例	量的アプローチの例	それぞれの要素に含まれる他の例
認識論	構築主義	客観主義	(主観主義など)
理論的視点	シンボリック相互作用論	実証主義	(現象学、フェミニズムなど)
方法論	エスノグラフィー	調査研究	(実験的研究、グラウンデッドセオリー、会話分析など)
手法	参与観察	統計分析	(サンプリング、質問票、インタビュー、ケーススタディなど)

(Crotty 1988: 2-9に示された図表を元に筆者が作成)

たちで、両者を「混ぜ合わせる」にしても、どの「要素」に注目して混ぜ合わせればよいのか、あるいは、質と量のどちらに比重をおいて混ぜ合わせるのか、さらには混合研究法を第三のアプローチとして位置づけてこの図式を適用するとどのように整理できるかといったことが議論されている (Creswell 2003)。

しかしながら、こうした議論は、ある整理図式に則った分類を示すものであって、その整理図式や分類自体の意義を問うたり、その有効性を検討したりできるものではない。つまりは、前に示したような、異なる哲学的背景を組み合わせることの困難を乗り越えるための手がかりを与えてくれるものではない。より具体的にいえば、こうした議論は、ある観点からみたときに社会科学の研究において異なる哲学的背景が混ぜ合わされているという、ひとつの認識を前提にしてはじめて組み立てられるものであって、どのような意味において双方のアプローチの哲学的背景が異なっているのかという問いや、そもそも、どのようにすれば異なる哲学的背景に基づく研究法を組み合わせることができるのかという問いに直接に答えてくれるものではない。これに対しては、たとえば、Morse & Niehaus (2009) は、基本的に質的アプローチと量的アプローチを併用することは不可能であり、一方をアドホックな補助として使用する場合に限り併用することができるという立場を表明していた。あるいは、Gorard (2010) は、研究方法は必要に応じてより個別のレベルで選択されるのみであり、両アプローチの混合を目指す以前に、そもそも質的アプローチと量的アプローチという枠組みで大別して論じることの意義に対して疑問を投げかけていた。さらに、川口 (2011) は、エスノグラフィや、質問紙調査に含まれる自由記述が、質的アプローチと量的アプローチのどちらに属しているのか、あるいは混合研究法と呼ぶのかという定義すら不明瞭であるなかで、混合研究法が漠然と論じられている現状を指摘していた (川口 2011: 53f)。

2. 技法間トライアングレーションを追求するための哲学的枠組みとしての批判的实在論の有用性

こうした研究背景を踏まえて本論が主張するのは、批判的实在論 (critical realism) という科学哲学に基づいて、いくつかの研究デザインを組み合わせる「技法間トライアングレーション」の有効性である。そもそも、複数の研究手法を組み合わせるときに重要なのは佐藤 (2005: 35f) が指摘するように、単なる折衷主義に陥らずに戦略的に研究を計画することである。さらに、批判的实在論が混合研究法に対して有益な視点を提供することは前に示した Tashakkori & Teddlie のハンドブックにおいても一章を使って検討されていた (Tashakkori & Teddlie 2010: 145-167)。しかしながら、そのような視点からより具体的に研究法を組み合わせるための戦略については、ふれられていない。そこで、そうした戦略を導き出すための科学方法論を展開するのが本論の試みである。

ここで、さらに論述を進めるにあたって本論の試みをより明確にするために、これまでで使用してきた「混合研究法」に替えて「技法間トライアングレーション」という用語を採用した理由について説明しておく。その主な理由は、混合研究法の定義の問題と、それぞれの方法の役割の違いに注目する本論の意図をより適切に表現してくれていることの2つである。

まずは、用語を入れ替えた1つ目の理由である混合研究法の定義の問題とは、「混合研究法」の示す内容が、前節でも示したように、質的アプローチと量的アプローチの両方を用いることに限定されていることである。つまりは、たとえ2つの研究法を組み合わせたとしても、質的アプローチと別の質的アプローチの併用だった場合には、定義に照らして「混合研究法」と見なすことは出来ない。しかしながら、最終的に本論が到着する研究アプローチの組

み合わせは、質的アプローチと量的アプローチの組み合わせに厳密に重なるものではない。そのために、より幅広い組み合わせを念頭にした「トライアングレーション」という用語が適切であると考えられる。

つづいて、用語を入れ替えた2つ目の理由は、「トライアングレーション」というイメージが、研究技法の間の役割の違いに注目する本論の意図をよく表現していることである。本論が採用する立場からすると、研究アプローチを組み合わせるときに重要なのは、複数性ではなく差異性である。つまりは、研究のなんらかの要素における数を多くすることによって研究の信頼性が高まることに注目するのではなく、それぞれ性質の違う研究技法が相補的に組み合わせられることによって信頼性が高まることに注目するのが本論の意図である。そのことを比喩的に表現し直せば、混合研究法を任意に入れ替え可能な方法同士の単なる「混ぜ合わせ」として想定するのではなく、それぞれのアプローチのあいだの「角度」(angle)を踏まえて適切に組み合わせることが重要なのである。つまりは、それぞれの研究技法が本質的にどのような点が異なっており、さらにそれを踏まえて両者がどのような関係にあるかを把握しないと、両者を適切に組み合わせることはできない。

その点で、従来までの質的アプローチと量的アプローチを単に並置している分類図式は、こうした議論の出発点とすることはできるが、どのように組み合わせるべきかという問いに対してそれ自体が有益な示唆を与えてくれるわけではない。より大切なのは、研究技法それぞれの本質的な役割分担を明確に示したうえで、それらを適切に組み合わせることである。そのために、役割分担に注目したうえで組み合わせるといふ、本論の意図をより正確に表現してくれる「トライアングレーション」という表現を好んで採用する。

さらに、そうしたトライアングレーションにおける技法間の「角度」、つまりは両者の役割の本質的な違いを把握するためには、両者を区別しながら

も同じ地平に並べることの出来る、より包括的な共通の哲学的な土台が必要となる。より詳しくは、まずは認識論よりもさらに包括的な「存在論」(ontology)という哲学的な枠組みに遡って、両者を包含することの出来るより統一的な枠組みを用意する。そしてその一つの枠組みのもとで、質的アプローチと量的アプローチのトライアングレーションに道筋をつけようとするのである。前述したように、質的アプローチと量的アプローチは単なるカウンターパートではなく、双方の位置づけに基づいた役割分担を想定することができる。そして、その役割分担は、とくに「インテンシヴ・デザイン」(intensive design)と「エクステンシヴ・デザイン」(extensive design)という特徴によって捉えることができる。しかしながら、そうした役割の違いを明確に把握するためには、批判的实在論の主張のなかでも、とくに「存在論的深さ」(ontological depth)について理解しておく必要がある。つまりは、従来までの科学方法論の議論にはなかった「存在論的深さ」を導入することによって初めて、質的アプローチと量的アプローチの適切な組み合わせ方を示すことが可能となるのである。

そこで、本論の残りの構成は次に示すようになっている。まずは次節(第三節)において、これまでの批判的实在論に基づいた先行研究において、質的アプローチと量的アプローチの組み合わせ方がどのように考えられていたかを、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという特徴に注目しつつ明らかにする。さらにそうした先行研究を批判的に検討することによって本論が目指す、「発見の文脈」と「正当化の文脈」の両方を踏まえたトライアングレーションのあり方をより明確にする。

続く第四節では、批判的实在論のもつ科学についての革新的な見方について、批判的实在論の提唱者であるRoy Bhaskarの所論を確認しておく。つまりは、「発見の文脈」と「正当化の文脈」を区別しつつも、つなぎ合わせることを可能とする「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」について明らかにす

る。

第五節では、これまでの議論をふまえて、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの本質的な違いを明らかにした上で、両者の本質的な役割分担について改めて検討する。

そして、最後に全体を振り返った上で、改めて本論の立場を明確にしておく。

3. 批判的实在論におけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区別の展開について

批判的实在論に基づくトライアングレーションを主張するにあたって、本節で検討しておかなくてはならないのは、批判的实在論を扱ったこれまでの研究において、質的アプローチと量的アプローチの組み合わせが、どのように論じられてきたかである。

ただし、ここであらかじめ断っておかなくてはならないのは、批判的实在論においては「質的」と「量的」という表現が積極的には使われてこなかったことである。批判的实在論においては、そうした表現に代えて、そうしたアプローチを「より良く特徴づけている」(Danarmark et al. 1997=2002=2015: 313)とされる、「インテンシヴ」と「エクステンシヴ」という表現が使用されてきた。そこで本論も、この区分に従ったうえで論述を進めることにする。

それでは、質的アプローチと量的アプローチの役割分担を導く、批判的实在論におけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区分がどのようなものとされてきたのかの詳細を、批判的实在論に関連する三つの研究の参照関係に従って確認していく。より具体的には、Harré (1979→1993)の研究、Sayer (1984→1992, 2000)の研究、Danarmarkら (Danarmark et al. 1997=2002=2015)による研究を発表された時系列に従って確認していく。さらに、それらを検討した上で、本論独自の立場を明確に示すことにする。

(1) Harréにおけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの区別について

Horace Romano Harréは、正確には批判的实在論のメンバーには含まれないものの、初期の批判的实在論に大きな影響を与えた人物である。全てを合しても1ページにも満たない少ない分量の記述ではあるが、彼はその著書、『社会的存在』(Social being)の中で、より一般的に使用されていた「インテンシヴ・デザイン」および「エクステンシヴ・デザイン」という概念を次に示すように整理した。

Harréは、社会心理学において行われているデータ収集のための「実験」(experiment)が持っている問題を体系的に論じるにあたって、問題を表面的な問題と根本的な問題に大別した上で、さらに表面的な問題とされるもののうちから四つを選び出して記述していた。そして、そのなかでも「データ損失の問題⁶⁾」(The loss of data problem)を論じるときに、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区別が持ち出されていた(Harré 1979→1993: 103f)。ここで、そのように直接の記述がされているわけではないが、今後の論点をより明確にするために補っておくと、そもそも、ここで注目されているのは集合的なクラスについての情報と、そのクラスに属する個別の成員についての情報との関係である。

Harréによるとインテンシヴ・デザインにおいては、クラス全体を代表するような典型的な成員が選択され、そして、詳細な観察や実験的な精査に供されるという。そして、典型的であるとされる一人に十分に類似している人々が収集されることによって、クラスの拡張は行われるとした。対して、エクステンシヴ・デザインにおいては、それに属する諸成員のデータを集めた上で統計的に処理することによって、クラスについての情報もたらされる。そして、一旦、クラスについての情報もたらされると、それぞれの成員はその情報に従う均一な要素として理解されることになる。

ここで改めて確認しておく、Harréの所論にお

いては、インテンシヴ・デザインが質的アプローチに、エクステンシヴ・デザインが量的アプローチに、それぞれ完全に重ねられている。つまりは、ここで記述されている「インテンシヴ・デザイン」および「エクステンシヴ・デザイン」は、より一般的に考えられている質的アプローチと量的アプローチにぴったりと重なる内容であって、批判的实在論に独自の内容を伴ったものではない。

ただし、この時点で既に後の研究につながる視点が提出されている。それは集団と個人という構図からみえてくる経験データの位置づけの問題である。そもそも、要約した箇所では Harré が主に注目していたのは、ある集団についての情報をどのように得るかということであった。そして、そのときに利用できるのは、個人レベルの経験的データに限られていた。そこで、Harré が扱ったのは、個人レベルのデータを通じて、どのように集団レベルの情報を得るかという問題であった。インテンシヴ・デザインによる質的アプローチにおいては、そもそも代表性が担保された個人が選択されていると考えるために「データ損失の問題」は起こらない。対して、エクステンシヴ・デザインによる量的アプローチにおいては、個人レベルのデータを統計的な処理にかけることによって、集団レベルの情報が引き出される。そして、今度は、集団レベルの情報によって、再び個別の特性を失った形で個人が理解されるために「データ損失の問題」が起ると考えられたのである。つまりは、そうした問題の前提となっていたのは、経験的に知ることのできる個人レベルのデータと、直接には知ることのできない集団レベルの情報という視点であった。そして、このように経験的に確認できることを通じて、経験的に確認できないことに間接的に迫っていく視点は、後の批判的实在論に受け継がれていく。

(2) Sayer におけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの区別について

Andrew Sayer (1984→1992, 2000) は、先に示し

た Harré の研究を受ける形で、さらに詳しくインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの区別を精緻化した。ただし、両者の考えにはいくつかの点で違いがみられる。そのひとつは、Harré が行っていたような社会心理学という特定の分野の研究における、「データ損失」というさらに特定の問題を明確に論じるための区別ではなく、より一般的な社会科学における研究デザインの区別を示すものとして示されていることである。さらには、研究室でおこなわれる実験的な要素についてだけでなく、より広い意味での経験を対象とした区分とされていることも確認できる。また、なかでもインテンシヴ・デザインの内容については、そのクラスを代表する典型的な例だけでなく、それ以外の個体⁷⁾に基づく研究についても含むものへと変更されている (Sayer1984→1992: 296)。そして、これによってインテンシヴ・デザインの位置づけが、ある事例を通じてその事例が含まれるクラス全体の特徴に迫ろうというものから、ある個別の事例そのものの特徴を追求するものへと変更されていることも確認できる。さらに、Sayer は次に参照するように、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの区別の要点を次に示す表にまとめている。

こうした区分においても、とくに「典型的な方法」の項目に示されているように、インテンシヴ・デザインは質的アプローチに、とエクステンシヴ・デザインは量的アプローチに重ねられていることが確認できる。ただし、この区分をより詳細に検討するためには批判的实在論のもつ特徴的な考え方を確認しておく必要があるため、ここでは上に示した表を提示するに留めて、より詳しい検討については、後程、順番に行っていく。

しかしながら、本論のテーマを踏まえたときには、ここでもう一点だけ確認しておかなくてはならない。それは、この区別がインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインを組み合わせるために提出されたものではないことだ。Sayer は、ある特定の研究において両者が組み合わせられていること (Sayer

表2⁹⁾ インテンシヴおよびエクステンシヴな経験的手続き

	インテンシヴ	エクステンシヴ
リサーチ・クエスチョン	ある特定の事例あるいは希少な事例において、あるプロセスがどのように働くか。なにが変化を生み出すか。エージェントは実際になにをするのか。	ある母集団の規則性、共通パターン、弁別的特徴は何か。分類され表象された若干の諸特徴ないしプロセスは、どれほどの範囲に及ぶか。
関係性	様々な結びつきの実質的關係	形式的な類似關係
研究される集団のタイプ	因果集団	分類の集団
生み出される説明のタイプ	いくつかの対象または出来事の産出の因果的説明、必ずしも代表的なものの説明でなくともよい。	説明的洞察を欠いた、記述的「代表的」一般化。
典型的な方法	因果的な文脈における個別のエージェントの研究、対話方式のインタビュー、エスノグラフィ、質的分析。	母集団あるいは代表的標本の大規模な調査、形式的アンケート、標準化されたインタビュー。統計的分析。
制限事項	アクチュアルで具体的なパターンと偶然的な諸關係は、「代表的」にも「平均的」にも、一般化しうるものでもない。発見された必然的諸關係は、その關係項が現にあるところ、たとえば、諸対象の因果諸力が他の文脈で一般化しうるものであり、その諸力がこの対象の必然的特徴であればどこでも、存在し続けるであろう。	全体的な母集団が代表的であったとしても、全体的な母集団が他の時間や空間における他の母集団に一般化されうるものとはなりそうにないこと。個別者について言及する生態学的誤謬の問題。制限された説明力。
適切な検証	裏付け、検証 (Corroboration)	追試、反復試行 (Replication)

(Sayer 1984→1992: 243)

1984→1992: 236) や両デザインが競合的ではなく相補的な關係であること (Sayer 1984→1992: 246) を認めるもの⁸⁾、積極的にこうした組み合わせを論じようとはしていなかった。

(3) Danermark らによるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインを組み合わせる試みについて

Berth Danermark らは、1997年にスウェーデン語で、2002年に英語で出版した『社会を説明する』(Explaining Society) のなかで、Sayer の区分を引き受けて、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインについて論じていた。さらには、彼らは、質的アプローチと量的アプローチの分裂を乗り越える意図を持って同書を執筆したことを明らかにしていた (Danermark et al. 1997=2002=2015: 5-8)。より詳しくは、彼らが問題としていたのは、社

会科学において両者のアプローチを組み合わせることが推奨されている一方で、有益に組み合わせるための「メタ理論」が用意されていないことにあった。そして、このメタ理論を批判的实在論によって用意しようとするのが彼らの試みであった。これらのことを確認するために引用文を示しておく。

私たちは伝統的な区別 [引用者註：質的アプローチと量的アプローチとの区分のこと] の代わりに、インテンシヴならびにエクステンシヴな経験的手続きという用語で、研究過程のこの部分を記述することを提案する。そこでは、その両方が——しかし異なった方法で——生成メカニズムの探査においても、有意義なのである。インテンシヴならびにエクステンシヴな手続きが、質的および量的な方法に関連しているしかたを、次のように記述することが出来る。すなわち、インテンシヴな経験的手続きは、データ

の収集の実質的な諸要素と質的な種類の分析とを含んでいる。エクステンシヴな手続きは、量的なデータ収集と統計的分析に係る。これらの相異なるデータの収集と分析方法は、批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈において設定されていることを心に留めておくことが重要になる。

(Danarmark et al. 1997=2002=2015: 243)

以上の引用によって確かめたのは、まずはインテンシヴおよびエクステンシヴという概念が、これまでと同様に質的方法および量的方法という区別に「関連している」と考えられていることである。しかしながら、さらに重要なのは Danermark らが、そうしたインテンシヴおよびエクステンシヴという概念を、それぞれ個別のものとして扱うだけでなく、両者を区分したうえで、さらに組み合わせることを目指していることである。このことは、『社会を説明する』の冒頭部分において、質的アプローチと量的アプローチの分裂を含むいくつかの不幸な二元論に対して、「あれかこれかのアプローチ」(either-or approach)ではなく「あれもこれも的アプローチ」(both-and approach)を擁護する立場を鮮明にしていることから確認できる (Danarmark et al. 1997=2002=2015: 5)。つまりは、Danermark らが支持するのは、質的アプローチと量的アプローチかのどちらか一方を選択することではなく、その両者を最適に組み合わせることを目指す「批判的方法論的多元主義」(critical methodological pluralism) (Danarmark et al. 1997=2002=2015: 228)であった。

くわえて、Danermark らがここでやっているのは、単に質的方法と量的方法を「混ぜ合わせる」べきだというレベルの主張に留まらないということにも注意しておく必要がある。彼らに関心を寄せている問題は、質的アプローチと量的アプローチを組み合わせるべきかどうかというレベルの問題ではない。そうではなく、社会科学的研究において両者を組み合わせる有益性が一般的に認められているにもかかわらず、それでもメタ理論的な立場から「有益な組み

合わせがどのようなものを意味しうるか」(Danarmark et al. 1997=2002=2015: 8)を学ぶことが許されない状況にあることが問題とされているのである。そして、前に示した引用文にあるような「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」に即した、質的アプローチと量的アプローチの「有益な組み合わせ」を示すことが目指されたのである。つまりは、Danermark らは、どのように質的アプローチと量的アプローチを組み合わせることができるかという、より具体的なレベルに問題を設定していた。

私たちの意見では、メタ理論とは、それらの異なる方法の用い方について、それらの限界を定めるものである。もしも、存在論の構想とその方法論的な応用との間に一貫した結びつきが欠けているならば、それらの方法の採用は、実り少ないものとなるであろうし、ときには完全に間違っものにさえなってしまうだろう。

(Danarmark et al. 2002=2015: 261f)

これまでに示してきたように、こうした考えには本論も大いに賛同するところである。さらに、それが「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」を踏まえることで行おうとすることも全く同じであった。

(4) 本論の立場：「発見の文脈」と「正当化の文脈」の両方を踏まえたトライアンギュレーション

以上のように、Danarmark らと本論の考えは大きく一致するところであるが、ただ一点において異なっていることを明確にしておく。それは、Danarmark らは、「発見の文脈」の重視を背景として、とくにインテンシヴ・デザインに優位性を置いて混合研究法を追求しているのに対して、本論の立場は、そうした優位性の設定を行わずに、「発見の文脈」と「正当化の文脈」を共に踏まえつつ、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの組み合わせを考察することにある。つまりは、Danarmark らは「批判的实在論の特殊なメタ理論的

な文脈」を「発見の文脈」を重視するものとして描き出すが、本論は「発見の文脈」と「正当化の文脈」の双方の役割分担を示すものとして描き出すところに違いがある。

このことに関して、まずは Danarmark らがインテンシヴ・デザインに優位性をみていることとその根拠を、引用文によって確認しておくこととなる。

… 研究過程はインテンシヴな要素とエクステンシヴな要素との両方に関わるということである。しかしながら、因果メカニズムを検出するために最も重要な要素は、インテンシヴな手続きであり、…

(Danarmark et al. 2002=2015: 249)

… 分類的な集団が経験的な素材として使われるエクステンシヴなアプローチでは、実質的關係を見つけることはほとんど期待することができないと。

Danarmark et al. 2002=2015: 250)

私たちは、[インテンシヴとエクステンシヴという] 2つのアプローチの所産であるいろいろなタイプの結果についてはすでに何度か言及してきた。[そこでは] インテンシヴなアプローチによってこそ生成メカニズムを明らかにしようという点で、[両者の間に] 非常に重要な違いがあることが明確になったであろう。

(Danarmark et al. 2002=2015: 260)

[補足説明については訳者]

後で詳しく論じるように、批判的实在論においては「生成メカニズム」(generating mechanisms) や「因果メカニズム」と呼ばれるものの発見が科学の任務として重視される。そして、先の引用文中では「生成メカニズムの探査」「因果メカニズムの検出」「実質的關係を見つける」と表現されていたような、生成メカニズムについての「発見の文脈」においてインテンシヴ・デザインにアドヴァンテージがある

ことを根拠として、とくにインテンシヴ・デザインに注目したうえで混合研究法が論じられていた。

しかしながら、Danarmark らも認めていたように、発見の文脈と正当化の文脈は「ひとつの同じ研究過程の異なる構成要素」(Danarmark et al. 2002=2015: 313) と考えられるものなので、発見の文脈だけでなく正当化の文脈も踏まえたトライアングレーションを探求することもできるはずである。さらに、それだけに留まらず、発見の文脈において「探知」や「理論生成」されたものを、正当化の文脈において「検証」することが、混合研究法を用いる最も一般的な目的であることは彼らも認めていた (Danarmark et al. 2002=2015: 230)。くわえて、批判的实在論の提唱者である Roy Bhaskar も生成メカニズムの理論モデルを作成するだけではなくそれを経験的にテストすることを踏まえた科学のあり方を主張していた (Bhaskar 1975→1997: 4-7)。しかしながら、そうした混合研究法の前提となる量的アプローチの旧来のとらえ方が「認識論的誤謬」(epistemic fallacy, 詳しくは次節で説明する) を含んでいることを理由として、彼らは正当化の文脈に関わるエクステンシヴ・デザインについては積極的に扱わなかった。

そこで本論が試みるのは、インテンシヴ・デザインだけではなく、エクステンシヴ・デザインについても、「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」に従って仕立て直した上で、両者のトライアングレーションを探求することにある。しかしながら、こうしたことを明確に論じるためには、批判的实在論についての「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」、とくに「存在論的深さ」について理解する必要がある。

4. 批判的实在論のメタ理論的な文脈： 「存在論的深さ」

主に Roy Bhaskar (1975→1997, 1979→1998) の所論に立ち返って、「インテンシヴおよびエクステ

ンシヴな経験の手続き」を検討するとき最低限として必要となる「批判的实在論の特殊なメタ理論的な文脈」を確認しておく。ここではとくに、「存在論的深さ」という、批判的实在論の核心をなす主張に絞って把握する。

(1) 批判的实在論における実在世界の構造について

まずは、批判的实在論において「实在」(real) という概念が、どのような意味を持つのかを明確にするところから始める。そこで「实在」が意味するのは、潜在的な「力」(power) を持っていることである。つまりは、ある存在物が、それ自身かそれ以外の存在物に対して、何らかの影響力を行使する可能性を持っているときに、「实在する」と考えられている。そのために、たとえ、いかなる潜在的な影響力も持たないものが存在していたとしても、それは批判的实在論が考える「实在」の範囲には含まれない。批判的实在論が想定する存在論が描き出すのは、少なくとも潜在的に何らかの影響力を持っているもののあいだの影響関係によって成り立っている世界

像である。

さらに、こうした「实在」のとらえ方から導き出されるのが「实在の3つのドメイン」である。あるものが实在しており、潜在的な力を持っていたとしても、それは必ず現象として起こるとは限らず、発現しないことも考えられる。さらには、たとえ現象として起こったとしても、それが観察などによって必ず経験されるとは限らない。つまりは、潜在的な影響力があることと、その影響力によってある出来事が起こることと、さらにそれが経験によって確かめられることの3つは、それぞれ重なってはいるものの全く同じことではない。

また、こうした「实在の3つのドメイン」のそれぞれを混同することは「認識論的誤謬」¹⁰⁾ と呼ばれる。たとえば、観察されたもの (A) だけを実在するもの (A + B + C) として扱うことである。あるいは、逆に、実在するもの (A + B + C) はすべて観察されている (A) と考えることである。

くわえて、「实在の3つのドメイン」相互の包含関係を考えるとそれぞれの「深さ」の違いを想

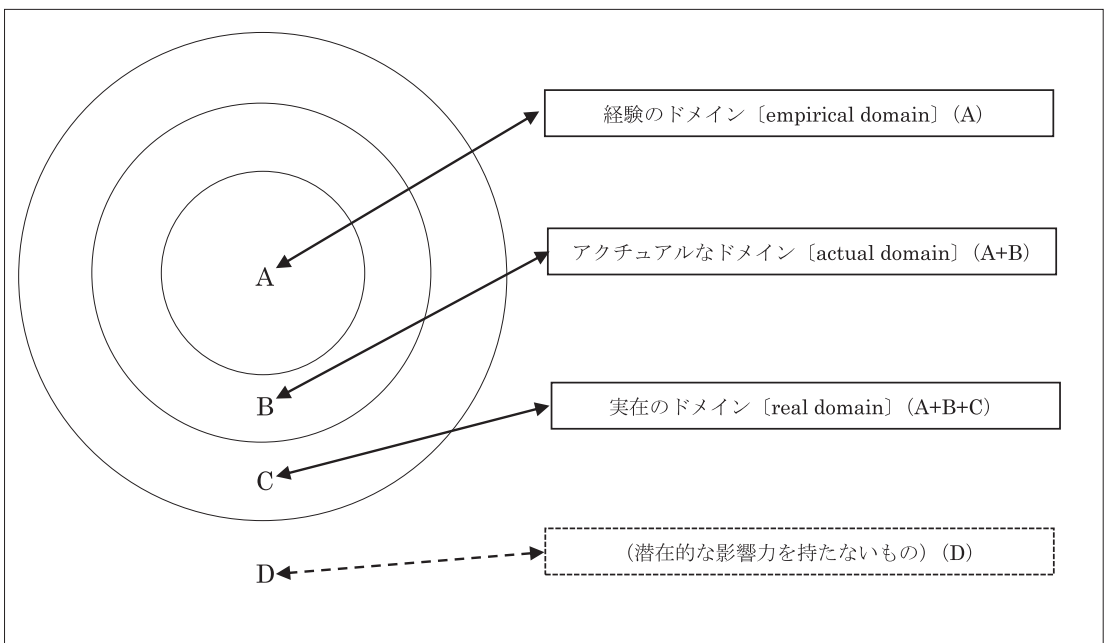


図1 実在世界の3つのドメイン

定することが出来る。経験されたこと (A) は、必ず起こったこと (A + B) であり、かつ、必ず潜在的な影響力を持っている (A + B + C)。つまりは、経験のドメインよりアクチュアルなドメインがより基礎的なものであり、さらにそれらよりも实在のドメインがさらなる基盤となっている。こうした实在世界の構造は、「存在論的深さ」と呼ばれる。

(2) 批判的实在論に基づいた科学の役割と因果のとりえ方の刷新

批判的实在論の考えるところ、科学の役割はこうした实在世界を因果性という基準によって把握するところにある。しかしながら、因果性といっても、従来までの実証主義のように因果法則としては扱われない。なぜならば、実証主義は、観察されたふたつの事実の随伴現象 (A) によって普遍的な因果関係 (A + B + C) を実証できると考えている点で、「認識論的誤謬」に陥っていると考えられるからである。そのために、「实在の3つのドメイン」に整合する因果性として、「生成メカニズム」と表現される因果関係が想定された。

さらに、批判的实在論は、それ自体を独立して取り出すことのできるような因果はないという立場を採用している。つまりは、因果そのものというものはなく、因果はある实在のもつ潜在的な影響力としてのみ現れるものとされる。このように、因果を「物象化」せず、常にある实在に含まれる、それ自体かほかの事物に対して変化をもたらすことのできる能力と考えることが批判的实在論の核心のひとつである。このことは「存在論的基礎」とも呼ばれている。そして、経験科学が採用している因果法則という考えは、この点も逃してしまい、因果法則を「物象化」していると考えられている (Bhaskar 1975→1997=2009: 54)。また、論理的な可能性においては「生成メカニズム」も「因果法則」と同じく物象化することができるので、批判的实在論における「生成メカニズム」には、实在するある事物に含まれる能力であるという制限が常に付されている。こ

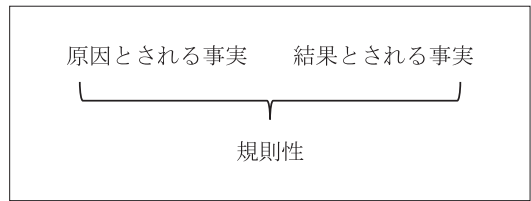


図2 因果についての実証主義者の見解 (Sayer 2000: 14を一部改変した)

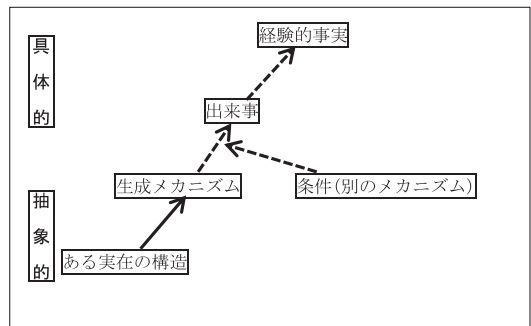


図3 因果についての批判的实在論者の見解 (Sayer 2000: 14に「経験的事実」の位置づけを追加)

うした論理構成によって、批判的实在論において、因果は常にある存在物とつなぎ合わされて語られることになる。

これらを踏まえると、批判的实在論者が想定する因果のイメージは、[図3]に示したようになる。まずは、ある实在のもつ構造によって潜在的な生成メカニズムが働いている。さらに、潜在的なメカニズムは、他のメカニズムとの関係によって、強められるだけでなく、打ち消されることもある。つまりは、潜在的なメカニズムが働いているからといって、必ずそのメカニズムに沿った現象が起こるわけではない。そして、また、ある現象が起こったからといって、それが必ず観察されているとは限らない。以上のように、因果は「存在論的深さ」をもっていると考えられるのである。

(3) 「存在論的深さ」を踏まえた経験的事実の位置づけ

ここで、これまでに抽象的な視点から語ってきた

「存在論的深さ」を、とくに本論のテーマにおいて重要となる、直接には観察することのできない生成メカニズムと観察することが可能な経験的事実との関係に絞って、具体例を挙げながら確認しておく。批判的実在論の考えるところ、とくに社会科学の大きな役割は、社会というある実在がもっている潜在的な生成メカニズムを解明することにある。そしてそのときには、「存在論的深さ」を踏まえうえて経験的データを適切に位置づけることが重要であった。

たとえば、日本社会の教育格差を調べるために質問票による社会調査を行なったとする。そして、世帯収入が高いほど、子どもの大学への進学率が高いという規則性が経験的に見いだせたとする。その時に重要なのは、「存在論的深さ」を踏まえて、経験的事実レベルの規則性を潜在的な因果メカニズムと混同しないことである。もちろん、経験的な規則性を確認することも大切であるが、それは社会科学にとっては、研究プロセスのひとつであって目的ではない。より重要なのはそうした経験的データを通じて、さらに深層にある因果メカニズムに迫ることなのである。

もしも、「認識論的誤謬」に陥り、経験的事実のレベル (A) と潜在的メカニズムのレベル (A + B + C) を混同してしまったときには、次に挙げるような問題に直面することになる。それは、ひとつには表面的な規則性 (A) を確かめることを社会科学の目的としてしまい、そこに留まってしまうこと

である。つまりは、具体例にひきつけるならば、調査によって変数の関係性を確かめたこと (A) をもって、潜在的なメカニズム (A + B + C) が確かめられたと考えてしまうことである。あるいは、逆に経験的な随伴性 (A) が確かめられないときに、それをもって潜在的メカニズム (A + B + C) が働いていないと考えてしまうことも考えられる。たとえば、学費の無償化などの施策によって世帯収入と大学への進学率に有意な関係が認められなくなった (A) としても、それは教育格差メカニズム (A + B + C) 自体がなくなったことを直接には意味しない。

5. インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの再定義とその必然的な組み合わせについて

(1) メカニズムに関する総体的な問い、インテンシヴな問いとエクステンシヴな問いの関係について

ここで、トライアングレーションにおけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの役割分担を検討するにあたって、まずは分担を行う以前の研究全体について検討しておく。そもそも、研究法を決定するのは「リサーチ・クエスチョン」である。つまりは、量や質といった調査によって得ることのできるデータの性質ではなく、研究において設定された問いこそが研究方法を決定するのである。こうした考えを Danarmark らも、Tashakkori & Teddlie (1998) の「研究における問いの独裁」(the dictatorship of the research question) という表現を引きつつ、存在論のパースペクティヴを踏まえるという条件のもとで肯定していた (Danarmark et al. 2002=2015: 229)。

さらに前節で示したように、批判的実在論において重視されていたのは、「存在論的深さ」というパースペクティヴであった。つまりは、経験的事実を通して、それとは区別される「存在論的深さ」にある生成メカニズムに迫ることが科学の任務であった。

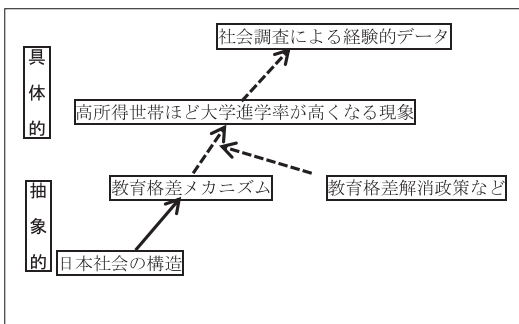


図4 因果についての批判的実在論者の見解 (具体例)

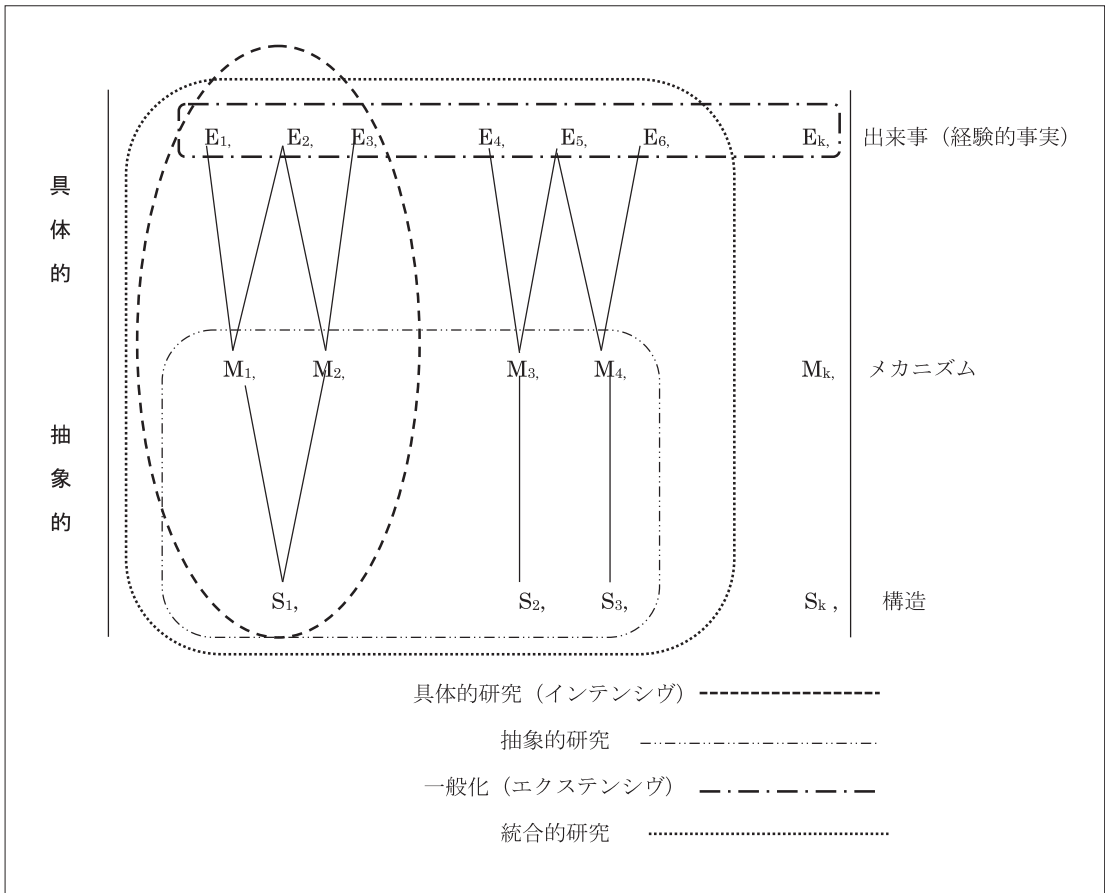


図5 調査の型¹¹⁾

(Sayer 1984→1992: 237に「経験的事実」の位置づけを追加)

そのために、研究全体を決定づける問いは、「ある実在がもっている生成メカニズムはどのようなものか」というものであった。

こうした科学論における哲学的背景を踏まえつつ、さらに具体的なレベルで研究法について議論するときにはじめて重要となるのが混合研究法やトライアングレーションの問題であった。そして、研究法を考えるとときに、批判的实在論という哲学的背景を踏まえて、発見の文脈と正当化の文脈の役割分担に注目するのが本論の立場であった。つまりは、「生成メカニズムはどのようなものか」という大きな問いを、発見の文脈に注目したインテンシヴ・デザインにおける問いと、正当化の文脈に注目したエ

クステンシヴ・デザインにおける問いという、より小さな二つの問いの組み合わせとして扱うことにある。

以上のような、批判的实在論の「存在論的深さ」を踏まえたときの研究全体とインテンシヴ・デザインおよびエクステンシヴ・デザインの関係については、上に示した Sayer の図に良く整理されている。

(2) 生成メカニズムの発見の文脈におけるインテンシヴな研究について

端的に表現すると、生成メカニズムを発見するのがインテンシヴ・デザインによる研究である。そして、このときの「発見」がどのような意味であるか

は、次の引用文が良く表している。

社会科学者は、以前に誰も知らなかったような新しい出来事を発見するのではない〔多くの場合、出来事や現象そのものはすでに知られている〕。そこで〔新たに〕発見されるものは、直接には観察できない結びつきや関係なのである。それによって、私たちはすでに知っている出来事を、新しい方法で理解し説明することが可能になるのである。

(Danarmark et al. 2002=2015: 138f)

前節で確認したように「存在論的深さ」を踏まえるならば、経験的事実や出来事と生成メカニズム(「直接には観察できない結びつきや関係」)は異なる存在次元のものである。そして、インテンシヴ・デザインにおいて発見されるのは、生成メカニズムであった。さらに、そうした発見の材料となるのが、既に知られている経験的事実であった。つまりは、一つ以上の具体的な現象から出発して、ある実在がもっていると考えられる生成メカニズムを推定することが、インテンシヴ・デザインによる研究の要点である。

さらには、そうした生成メカニズムについての言明は、そもそも超事実的なものなので経験的事実に照らして正しいとも間違っているとも言うことができない。たとえば、ある実存がある生成メカニズムをもっていると想定されており、かつ、そのメカニズムでは説明することのできない事実が確認されたとしても、それをもってメカニズムについての推論が間違っていたと断定することはできない。なぜならば、批判的実在論においては客観的事実と生成メカニズムのあいだに「存在論的深さ」の違いが設定されているので、生成メカニズムは働いているものの、それが客観的事実として観察されていないだけという可能性を否定できないのである。また、それとは反対に想定した生成メカニズムに従った客観的事実が確認されたとしても、それとは異なる生成メカニズムが働いた結果である可能性を排除しない限

りは、想定が正しかったと断定することもできない。そのために、生成メカニズムそれ自体は、経験的事実によって正当化することも棄却することもできないのである。

このように、インテンシヴな研究においては、あるひとつの実在が持っている「存在論的深さ」を前提として、ある経験的事実から生成メカニズムを推定することが行われていた。つまりは、インテンシヴな研究が答えることができるのは、「ある実在が引き起こした出来事から振り返って、どのような生成メカニズムを推定することができるか」という、生成メカニズムの発見に関する問いなのである。

(3) 生成メカニズムの正当化の文脈におけるエクステンシヴな研究について

生成メカニズムを発見することがインテンシヴな研究の役割であったのに対して、発見された生成メカニズムを正当化するのがエクステンシヴな研究の役割である。つまりは、インテンシヴな研究の出発点が経験的事実であったのに対して、エクステンシヴな研究の出発点は、なんらかの形で既に推定されている生成メカニズムである。なぜならば、推定された生成メカニズムの正当性を問うためには、あらかじめ生成メカニズムを推定しておく必要があるからである。つまりは、エクステンシヴな研究が行われるときには、必ず先行してインテンシヴな研究が行われている。

しかしながら、こうした「エクステンシヴな研究に対するインテンシヴな研究の必然的な先行性」は、インテンシヴな研究に独自の役割を検討することを難しくする。前頁に示した Sayer の「調査の型」(図5)を確認すると、エクステンシヴな研究は客観的事実だけを扱うものとして位置づけられている。そして、インテンシヴな研究とエクステンシヴな研究の「調査の型」に注目したときには、この位置づけは決して間違っていない。しかしながら、「必然的な先行性」を踏まえたときには、実際には分担したエクステンシヴな研究の役割が単独で現れるので

はなく、必ずインテンシヴな研究とエクステンシヴな研究の組み合わせの結果として、つまりは図5に示された「総合的研究」(ジンテーゼ: synthesis)として現れるのである。そして、それらが不可避的に組み合わせられていることを理解していないと、エクステンシヴな研究の役割を単独で取り出して検討することは難しい。

それでは、以上の点を踏まえて明らかになるエクステンシヴな研究単独での役割とは、つまりは「生成メカニズムの正当化」とは、どのようなものであろうか。それは、複数の観察された事実を関係づけることを通じて、推定された生成メカニズムを検証することにある。

そもそも、前項で確認したように、インテンシヴな研究によって可能だったのは、あるひとつの客観的な事実から出発して、その背後にある生成メカニズムを推定することであった。このことを、[図5]に沿って書き直せば、縦軸にそって下へと進む単線的な関係性のみである。そして、インテンシヴな研究を複数回行ったとしても、それで明らかになるのは、いくつかの「縦の関係」にすぎない。そこで、エクステンシヴな研究が組み合わさることによって、バラバラの縦の関係をはじめ「面」で捉えられるようになるのである。さらに詳しく説明すれば、生成メカニズムの解明をめざす科学において大切なのは、生成メカニズムと出来事との複線的な関係を把握することである。

ここで、もう一度「因果についての批判的实在論者の見解」(図3)に立ち戻って確認しておく、ある生成メカニズムが働いているからといって、必ずしもその影響によってある出来事が起こるとは考えられていなかった。なぜならば、そこでは、対象以外の生成メカニズムが「条件」として働いていると考えられるからである。そこで、エクステンシヴな研究によって推定された生成メカニズムを正当化するときにも重要となるのがこうした「条件」である。つまりは、あるメカニズムを持っていると考えられる实在についてのいくつかの異なる条件の下での経

験的事実を関係づけることによって、どのような条件のもとで、その生成メカニズムが現象として確認できるのかに迫ることができるのである。そして、そうした条件を解明することは、生成メカニズムと出来事や経験的事実の間にある「存在論的な深さ」の違いを埋めることにつながるの、結果として当の生成メカニズムを正当化することにつながるのである。

このことを、これまでにも示してきた教育格差メカニズムの例で説明しておく次のようになる。あらかじめ、インテンシヴな研究により日本社会における教育格差メカニズムが推定されているとする。さらに、複数回の社会調査データが得られているとする。そこで、ある教育格差解消政策が実施される前のデータと実施後のデータが得られたとすると、それを比較することによって教育格差メカニズムがより具体的な現象として起こるための条件を明らかにすることができる。たとえば、大学の授業料を引き下げるような政策を実施した結果として高所得世帯ほど大学進学率が高くなる傾向が弱まったのであれば、そうした政策は教育格差メカニズムを打ち消す条件であると考えられる。そして、そうした条件を踏まえることによって、当の教育格差メカニズムが働いていることをより正当化することにもつながっているのである。

このように、エクステンシヴな研究においては、推定されたある生成メカニズムを前提として、複数の経験的事実によってその生成メカニズムを正当化することが行われていた。つまりは、エクステンシヴな研究が答えることができるのは、「ある生成メカニズムが現象として現れるための条件はなにか」という、生成メカニズムの正当化に関する問いなのである。

6. インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの再定義とそれを論じる意義について

これまでに述べてきた、インテンシヴ・デザイン

	①客観的事実における規則性の把握	②インテンシヴ・デザイン	③エクステンシヴ・デザイン
リサーチ・クエスチョン	経験的事実の間にもどのような規則性が確認できるか	ある規則性を生み出す生成メカニズムはどのようなものか	ある生成メカニズムが現象として現れるための条件はなにか
出発点	——	経験的に確認できる規則性	推定されている生成メカニズム
文脈	規則性の発見	生成メカニズムの発見	生成メカニズムの正当化
役割	ある事象の規則性の同定	経験的な規則性についての理論的説明	理論的説明の中で想定された存在や作用の実在性の点検
科学哲学における学説史の展開にしめる位置	古典的経験論	超越論的観念論	批判的实在論

図6 トライアングレーションのためのリサーチデザインの展開

とエクステンシヴ・デザインの再定義の内容を、Bhaskarの「科学的発見をめぐる弁証法」(Bhaskar 1975→1997=2009: x)を踏まえてまとめると上の図になる。

この再定義において特に重要なのは、規則性の確認と生成メカニズムの発見を区別することと、展開される段階の違いとしてリサーチデザインを描き出すことの二つである。一つ目のポイントである規則性の確認と生成メカニズムの発見の区別は、これまでに混同されがちだった両者の関係を明確にしてくれる。さらに、これによって、批判的实在論がいうところの「認識論的誤謬」の問題を回避することのできるリサーチ・デザインを提供してくれる。

もうひとつのポイントである、展開される段階の違いとしてリサーチ・デザインを描き出すことは、従来までの「混合」というイメージを超えて、より具体的な複数の研究法の組み合わせ方のひとつを示してくれる。つまりは、規則性の確認から始まり、そうした規則性を生み出すメカニズムの導出、さらにはメカニズムの検証への段階的な展開である。個

別の研究論文などとしては、経験的な規則性の発見や生成メカニズムの導出に留まるものであっても成立する。しかしながら、より総合的な研究活動全体を考えたときには、生成メカニズムを軸としたこのような研究の展開を想定することができる。

さいごに、こうした再定義の試みの意義について、「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」(Hegel 1820-1970=2001: 30)という有名な文章を念頭に述べてみたい。この文章は、哲学が現実世界についての思考である以上は、ある現実があってはじめてそれについての思考が成立することを捉えたものである。つまりは、ある現実が起こってはじめて、その現実に対するある認識が成立するのである。そして、そうした認識を追求したところで、ある現実自体が変わるものではない。

こうしたことは、哲学全般の意義のみならず、本論のような科学哲学の意義においても同様である。つまりは、これまでも質的アプローチと量的アプローチの混合研究法による優れた研究は行われてき

ており、それらに対してインテンシヴおよびエクステンシヴ・アプローチのトライアングレーションを提唱する本論が付け加えるべき「新しい研究法」などはない。異なる研究法の組み合わせについての新たな理解を示したところで、これまでに行われた混合研究の価値が変わるわけではない。まさに、Bhaskar も同じ Hegel の考えを引きながら表現しているように「哲学はいつも遅れてやってくる」(Bhaskar 1975→1997=2009: x) ののである。

しかしながら、本論は単に現実を追認することを目指したものではない。つまりは、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインのトライアングレーションはこれまでの研究においても既に実践されていることではあるが、しかしながら、その意義が正しく理解されていないことがある。そして、既に行われた研究ではなく、これから研究を行おうとするときには、研究についての新たな理解が道案内の役割を果たしてくれることがある。そのために、こうして既に行われていることを再検討してみることは、ときに意義を持つのである。そのようなものとして、本論の内容が混合研究法についての読者の理解を少しでも深めるものとなっていれば幸いである。

注

- 1) 他にも、「マルチメソッド」(multi-method)と表記されることもある。また、mixed methods research の日本語訳表記においては、「混合型の研究手法」「ミックス法」「ミックスメソッド」が使われることもある。
- 2) 日本語訳については、中村 (2013) に従った。
- 3) ただし、創刊号の出版については2007年であった。
- 4) 混合研究法の展開過程については、Creswell & Clark (2003) や大谷 (2014) が詳しい。
- 5) 2014年には、日本混合研究法学会も設立されている。
- 6) 本論の問題設定からは外れるが、Harré が問題視するのは、とくにエクステンシヴ・デザイン

(量的アプローチ)を採用してクラスを扱うときに、そのクラスに含まれる個別の成員達が持っている違いが捨象されてしまうことであった。こうして、クラスの各成員が均一なものとして扱われることを、Harré は「社会心理学者の誤謬」(the social psychologists's fallacy)と名付けていた。

- 7) ここでいう individuals は、個人という意味に限らないと示されている (Sayer 1984→1992: 241)。
- 8) Tashakkori & Teddlie のハンドブックにおいては、この傾向は「因果記述」(causal description)と「因果説明」(causal explanation)の関係として示されている (Tashakkori & Teddlie 2010: 154-156)。
- 9) ただし、Sayer の1992年の著書においては「図」として示されている。しかし、その後には出版された著作で自ら引用する場合には、「表」としての扱いに差し替えられている。
- 10) より正確には、「認識論的誤謬とは、存在物に関する言明は例外なく存在物に対する人間の認識に関する言明に翻訳される、とする見方」(Bhaskar 1975=2009: 7)と示されている。
- 11) この図において、実在のドメインとアクチュアルなドメインは考慮されているものの、経験のドメインについては考慮されていない。ただし、批判的实在論においてアクチュアルなドメインにおける「出来事」と経験のドメインにおける「客観的事実」は区別されるものではあるが、以降の記述内容においてこの区別が焦点となることはない。両者を一体のものとして扱う。

引用文献

- Bhaskar, R. A. (1997) [1975], *A Realist Theory of Science*, London: Verso. (=『科学と实在論——超越論的实在論と経験主義批判』, 式部信 訳, 法政大学出版局, 2009年)
- Bhaskar, R. A. (1998) [1979], *The Possibility of Naturalism* (3rd edition), London: Routledge. (=『自然主義の可能性——現代社会科学批判』, 式部信 訳, 晃洋書房, 2006年)
- Campbell, D. T. & Fiske, D. W. (1959). Convergent and discriminant validation by the multitrait-

- multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, 56, 2, 81-105.
- Creswell, J. W. (2003). *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed method approaches*. Thousand Oaks, Calif: Sage Publications. (=『研究デザイン: 質的・量的・そしてミックス法』, 操華子・森岡崇 訳, 日本看護協会出版会, 2007年)
- Creswell, J. W., & Plano, C. V. L. (2007). *Designing and conducting mixed methods research*. Thousand Oaks, Calif: SAGE Publications. (=『人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』, 大谷順子 訳, 北大路書房, 2010年)
- Crotty, M. (1998). *The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process*. London: Sage Publications.
- Denzin, N. K. (1970). *The research act: A theoretical introduction to sociological methods*. Chicago: Aldine Pub. Co.
- Danermark, B. (2002). *Explaining society: An Introduction to critical realism in the social sciences*. Hoboken: Taylor and Francis. (=『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』, 佐藤春吉 監訳, ナカニシヤ出版, 2015年)
- Gorard, Stephen (2010) Research Design, as Independent of Methods. In: *SAGE Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*. Sage Publications, Los Angeles.
- Harré, R. (1993) [1979] *Social Being*, (2nd edn.) Oxford: Basil Blackwell.
- Hegel, G. W. F. (1970) [1821] *Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse*, in: *Werke in zwanzig Bänden*, Bd.7, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. (=『法の哲学I』, 藤野渉・赤沢正敏訳, 中公論新社, 2001年)
- Johnson, B., Onwuegbuzie, A., & Turner, L. (2007). Toward a Definition of Mixed Methods Research. *Journal of Mixed Methods Research*, 1, 2, 112-133.
- Morse, J. M., & Niehaus, L. (2009). *Mixed method design: Principles and procedures*. Walnut Creek, Calif: Left Coast Press.
- Sayer A. (1992) [1984] *Method in social science*. London: Routledge.
- Sayer A. (2000) *Realism and social science*. London: Sage Publications.
- Tashakkori, A. & Teddlie C. (eds) (1998) *Mixed Methods in Social & Behavioral Research* (2nd edition), Los Angeles, CA: Sage.
- Tashakkori, A. & Teddlie C. (eds) (2010) *Handbook of Mixed Methods Research*, (2nd edition), Thousand Oaks, CA: Sage.
- 大谷順子 (2013) 「混合研究法の国際的動向」『社会と調査』, 11, 12-21.
- 川口俊明 (2011) 「教育学における混合研究法の可能性」『教育学研究』, 78, 4, 386-397.
- 桜井厚 (2003) 「社会調査の困難—問題の所在をめぐって」『社会学評論』, 53, 4, 452-470.
- 佐藤郁哉 (2005) 「トライアングレーション (方法論的複眼) とは何か?」『インターナショナルナーシング-レビュー』, 28, 2, 30-36.
- 中村高康 (2013) 「質と量を架橋する—混合研究法 (mixed methods research) の可能性」『社会と調査』, 11, 4-11.
- 樋口倫代 (2011) 「現場からの発信手段としての混合研究法—量的アプローチと質的アプローチの併用」『国際保健医療』, 26, 2, 107-117.

参考 URL

- James Drisko (2011) on Oxford Bibliographies [Triangulation] <http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780195389678/obo-9780195389678-0045.xml> (閲覧日2016年1月26日)
- Journal of Mixed Methods Research (2016) <https://us.sagepub.com/en-us/nam/journal-of-mixed-methods-research/journal201775> (閲覧日2016年1月26日)
- 日本混合研究法学会 (n.d.) <http://www.jsmmr.org/> (閲覧日2016年1月26日)

Triangulation between Two Research Designs Based on Critical Realism : Refining the Concepts of Intensive and Extensive Design

NOMURA Masaruⁱ

Abstract : In recent years, discussions about “mixed methods research,” a combination of both qualitative and quantitative approaches, have been thrust into the spotlight. In particular, the typology of researches has become one of the main subjects of debate. These discussions premise that multiple data types and investigators, theoretical frameworks, and methods have increased the validity of research findings. More particularly, however, the fundamental question about the significance of mixed methods is not clear. In what type of case should multiple research methods be combined? This paper discusses the significance of mixed methods through theoretical study from the perspective of critical realism, especially employing the idea of “ontological depth.” In addition, while the classification of qualitative approach and quantitative approach is only suitable as a starting point for this discussion, the classifications of extensive design and intensive design are alternatively adopted as a result of re-examination. In conclusion, the “triangulation” between intensive design and extensive design, based on the ontological position of the research question, is significant. Intensive design estimates the generating mechanism from an objective fact. Extensive design validates the reality of the generating mechanism from the relation of objective facts. Because only estimated mechanisms are allowed to be used for validation, intensive design always precedes extensive design. The combination of intensive design and extensive design enable placement of the generating mechanism in reality.

Keywords : science methodology, mixed research method, triangulation, philosophy of science, scientific realism, critical realism, ontological depth

ⁱ Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University